OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フッサールの「世代発生的考察」について
Author(s)	前田, 直哉
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2004, 38, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フッサールの「世代発生的考察」について

前田直哉

フッサールは後期の思索の中で「歴史」の問題、とりわけ人類が歴史上、固有の文化として育んできた「学問」の伝統を取り上げ[1]主題的に考察したが、「歴史」をめぐる彼の超越論的分析は一九三〇年をほぼ境にして、人間や動物たちの織り成す「世代 Generation」という事象を巻き込みつつ徐々に拡大され、深められてゆくこととなった。その中で彼は、世代間の連鎖的関係をしばしば "fortpflanzen" もしくはその名詞形 "Fortpflanzung" という語によって形容している。この語には「繁殖」と「伝播」という二つのニュアンスが含まれているが、「世代」に関する彼の考察もこの二義に応じて、「生の繁殖」をめぐるものと「意味の伝播」に関わるものとに差し当たりは大別することができる。つまりそこでは一方において、或る世代が後世を担うべき子孫を残し、「生」の連鎖を紡いでゆく生物学的な進化発展の過程が超越論的に分析されている。そして他方では、それら諸世代を通じて、人間の構成的能作の所産が「伝統」として継承される、精神的な「意味」伝達の過程が考察される。「厳密な学的哲学」の樹立を終生の課題としたフッサールにあって、人間の文化的伝統をめぐる後者の分析は、とりわけ古代ギリシアに端を発する「学問」の伝統へと焦点化されていることは言うまでもない。

このように三〇年代以降のフッサールは、「繁殖」によって形成される「世代」を通じて「意味」が発生し「伝播」するという歴史性の世代発生的側面に注目し、こうした事態を可能にするものを「世代性 Generativität」という独自の超越論的概念で捉えた。近年、スタインボックはこの方面でのフッサールの断片的な諸草稿を詳細に吟味して、「世代」が論究される際、なかば無自覚的に遂行されていた分析方法を明示化し、「世代発生的現象学」という新たな現象学的方法として提唱している。(2)

本稿では、フッサールが遺稿の中に書き残した多面的で体系的な纏まりを欠く「世代発生的」考察に焦点を当て、第一節ではまず、彼の思索において「世代」というものがそもそも問われるべき「事象」として差し迫ってきた内的な要因を明らかにする。第二節ではこの考察の内実を、自然科学的意味での「個体発生」と「系統発生」を手引きとして「発生」の観点から概略的に示す。第三節では、スタインボックらの議論を参照しつつ、異文化理解についての世代発生的考察を取り上げる。

第一節　世代発生的考察の動機について

人間を含め、あらゆる動植物が形成する「世代」というものがなぜ、超越論的現象学の「事象」として殊更、問い質されねばならなかったのか、本節ではその動機もしくは意図を明らかにしたい。

そもそも世代発生的問題は、フッサールの超越論的現象学の体系内において、いかなる位置を占めているのであろうか。その所在については、例えば三〇年の「大きな体系的著作」の執筆計画から窺い知ることができよう。その構想案によると、「体系的著作」は全五巻から成り、第一巻および第二巻では「自我論的意識論の基礎」や「自我

論的現実の構成」といった、意識志向性の「差し当たりは静態的」な構造分析が論じられる予定であった。これを受けて第三巻では「受動的発生の理論、連合」の問題など、発生的分析が導入される。以上の三巻はいわゆる「独我論的」現象学に相当し、他者との共同性に関わる「相互主観性」や「自己移入」、「史的世界の構成」といった諸問題は、続く第四巻の主題として割り当てられている。そしてフッサールは最終第五巻の構想を次のように記す。「客観的世界の超越論的発生。人間および人類の超越論的発生。世代発生の問題。自己保存、真正性における人間の問題、人類と運命。目的論的問題および神の問題」[3]。

このように世代発生的問題は、他者や歴史をめぐる諸分析に後続しながら、「人類」と「客観的世界」の相関的な「超越論的発生」や「目的論」などといった主題とともに、独立した最後の一巻を成すものとして構想されていた。実際、『デカルト的省察』の中でフッサールは、「誕生と死」や「動物性 Animalität の世代連関」を例に挙げつつ、これらの現象学的解明は「明らかに高い次元に属する」(I, 169) と述べ、あり得べき考察の方向性を示唆するにとどめている。そもそも「世代性」とは、ヴァルデンフェルスの言葉を借りると「私が他者とともに世界に生まれ、世界のうちにいるというだけでなく、他者から生まれ、他者へと生を継承する weiterleben ということを意味する」[4]。しかし他者によって生み出され、他者を生み出し得る存在として、「私」をその生殖的な「世代性」の契機から把握することは、当然のことながら発生的な分析を要求し、「第五省察」において時間性を度外視した上で展開される自他の静態的分析では不可能な試みに留まる。

また、客観的世界の調和的構成という「第五省察」本来の主旨から見ても、静態的な枠組みの中で提示される「相互主観性」の概念では「世代」の連鎖を射程に収めることはできない。フッサールは「無限の空間」のうちに点在

する人間や動物たちの「モナド的共同性」を「超越論的な相互主観性」と呼ぶが（I, 158）、世界の相互主観的構成を真摯に解明しようとする限り、そのモナド的な相互主観性が、いわば「無限の時間」において遂行するであろう構成の諸能作もまた、ともに考慮されねばなるまい。

『省察』以降フッサールは、相互主観性の分析を発生的な次元へと展開し、世界構成に歴史的に参与してきた、また参与し得る他者たちを様々な角度から分析する。世代をめぐる問題の地平は、こうした思索の深化の中で切り拓かれたと言える。「超越論的相互主観性にはその核において、誕生と死を伴った世代発生的なものが属する」（XXIX, 87）と言われるとき、単に両親から生まれ子を生むであろう「私」というにとどまらず、太古の昔から果てしない未来へと「生」を紡ぎ「意味」を継承し続ける「われわれ」の包括的な世代連関が問われることとなる。

これとともに、世代発生的考察に込められた学問論的意図もまた推察されよう。哲学の究極的な基礎づけというフッサールの目論見は周知のように『危機』において、現象学の歴史的基礎づけというプログラムとして公にされた。彼は哲学史の内側に「目的論的統一」を見出し、過去から未来へ永続する学問の理念を語り出した。哲学は事実上、古代ギリシアにおいて、あらゆる存在者の総体についての学として誕生したが、「ここ（＝ギリシアでの原創設）に、目的論的な端緒が、即ちヨーロッパ的精神一般の真の誕生が存する」（VI, 72）。そしてその「原創設」以来、「哲学即ち学問とは、人間性そのものに『生得的な』、普遍的理性を開示する史的運動であろう」（VI, 13f.）と彼は言う。

それでは超越論的現象学の成立によって、学問はこの「史的運動」に終止符を打ち、首尾一貫した完成形態として実現されるのであろうか。「ブリタニカ草稿」は次のように締め括られている。「現象学は現象学者に対して、自

分だけで哲学的体系の理想を手にするという欲望を諦めるよう要求するが、やはり他者との共同性において謙虚に働く者として、永遠の哲学のために生きるように要求する」(IX, 301) と。『省察』においても彼は「絶対的な基礎づけに基づく普遍的な学としての哲学というデカルト的理念の具体的な可能性」を称揚する一方、その理念の「実際的な遂行可能性」は「無限のプログラム」に留まることを当然の如く承認していた (I, 178)。

従って世代発生的考察は、「相互主観的」分析が「歴史性」の次元へと拡大、深化されたことを受けて、生の連鎖やそれを貫徹する意味伝播の過程が現象学の「事象」として前景化したことと並び、現象学そのものの基礎づけが実際上は後世に託されるべき「無限のプログラム」であるとの自覚の深まりから要請されたものであると言える。それは「互いとともに、また互いに対立し合う研究者たちの開かれた世代の連鎖 Generationskette」(VI, 367) の中で、繰り返し探求されるべき無限のテロスに他ならない。

第二節 「世代」についての「発生」的考察

それでは世代発生的考察においては具体的に、いかなる事象が取り扱われているのだろうか。その内実が差し当たりは「生の繁殖」と「意味の伝播」に二分されることは既に述べたが、「世代」という事象を自然的に受け取る限り、生殖による世代形成が意味伝播の前提を為すことは言うまでもない。従って第一に挙げられるのは、「誕生と死」の現象である。三〇年代以降、フッサールは「世界と、誕生および死を（従って世代性を）、真剣に本質関係のうちに置くこと」(XV, 171) の意義に目を向けたが、「死」については今は措くとして、本節では「誕生」の現象を自然科学的意味での「発生」の問題と結び付け、「世代」の「発生」をめぐる諸考察に焦点を当てる。この方向において

フッサールは「身体的（純粋に生物学的）な個体発生および系統発生」と、「心理学的系統発生」（I, 168）という問題を示唆している。「身体的（純粋に生物学的）」発生と「心理学的」発生は、それぞれ「繁殖」と「伝播」に相当すると言えるが、彼はさらに「個体発生 Ontogenese」と「系統発生 Phylogenese」というもう一組の対立概念を超越論的分析の「手引き」として導入している。自然科学的概念に基づく分類はあくまでも便宜的なものに過ぎないが、「世代性」をめぐる多面的な超越論的分析を整理する上では有益であると思われる。以下では（一）個体の身体的発生、（二）種の身体的発生、（三）「心理学的系統発生」の順に、それぞれの分析内容を概観する。

（一）　例えば「世代発生的連関は新生児、……いわゆる胎児 Embryonen を包括する」（XV, 178）と言われるように、フッサールは生物学で言うところの「個体発生」より端的には「生殖」の問題を現象学の事象と見定めている。別稿では、そうした身体的発生をそもそも可能にするものとして、「交接 Kopulation」即ち「相互主観的な『生殖行為 Zeugungsakt』」（XV, 597）が取り上げられ、さらには異性への「性的渇望」が考察の俎上にのせられている。その際、性的欲求は自我から発する能動的な志向性としてではなく、「自我なき ichlos」受動的志向性、即ち「衝動志向性 Triebintentionalität」として論じられるのだが、個体の誕生を性的な「衝動志向性」とその「充実」に関係付けるこの分析は、個体発生の枠組みを越えて、動物から「人間にまで至る」段階系列の全体を包括的に捉える観点へと結びつく。「あらゆるモナドは本質に即して世代発生的連関のうちにある」（XV, 596）と言われるとき、そこでは既に生物進化の「系統発生」が念頭に置かれている。

（二）　「人間ならびに或る種の動物の世代発生的連関、それから系統発生的にさらに進んで、あらゆる動物種が世代発生的統一へ、血統の統一へと結び付く。最終的には有機的存在一般の統一へと結び付く」（XV, 179）。フッサー

ルは「系統発生」という生物学的概念をもとに、「有機的存在一般」を包摂する壮大な目的論を構想していた。彼によれば「種概念は物体の概念のようなものではなく、『目的論的概念』」(XXIX, 318Rb.)である。自然界における動物種の「『現存在』をめぐる争い」はときに、「種の新生 Neugeburt」や「新たな生存条件へ『適合』した種の変化」(XV, 666)といった出来事を引き起こすように、種の連続性を支配する「繁殖 Fortpflanzung の法則」(XXIX, 317)は決して、種の平坦な存続を保証するものではない。彼は「狼」という種の誕生を範例に採り次のように述べている。「狼の原創設は、以前の生殖的な種におけるこの異常なものが、新たな目的論的状況の安定性によって『狼』〔という種〕の目的論を安定させるということを意味する」(XXIX, 319)と。フッサールはこのように、系統発生における種の分化や環境への適合を支配する「繁殖の法則」を「目的論の法則」(XXIX, 320)として捉える。そして人間種の原創設によって、精神的な世代性、即ち意味伝播の可能性が切り開かれる。

(三) フッサールは系統発生的連関に対して「他の世代性」、つまり「人格的存在にもっぱら特有の」(XV, 179)世代性を取り上げ、「自然的な人格的連帯」から「人間民族 Menschenvolk」としての「全体的連帯」にまで至る人類のいわば精神史的発展に言及している。以下ではまず人類が辿ったとされる「歴史性」の諸段階を示したい。

「種」として誕生を遂げたばかりの段階、即ち「根源的なアニミズム」(XXIX, 3)において、人間は「本質に即した歴史的意識を欠いた、史的現在」(XXIX, 4)を生きるに過ぎない。消え失せた過去を対象化し得る「普遍的」な知の欠如という点に、フッサールは原始的な人間と動物との連続性を見出し、これを「潜在的歴史性の原段階 Urstufe」(XXIX, 5)と呼ぶ。人間が他の動物を完全に凌駕し、この「原段階」を超克したのは、「民族 Volk」的に有意義な過去の諸事実を秩序付け、文献として保存する「史料編纂 Historiographie」の技術を獲得したが故であ

る。これによって到達された段階を彼は「第一の歴史性 Historizität」(XXIX, 40) と呼び、古代ギリシアにおける「学問」の原創設を機に人類が我がものとした「理論的態度」、即ち「第二の歴史性」(XXIX, 41) とは区別している。

それでは歴史を通じての意味「伝播」はいかにして展開され得るのであろうか。「幾何学の起源」への遡及的分析が示すところによれば、幾何学の創始者個人のうちに生じた何らかの主観的形象が、世代を通じてイデアールな客観性を獲得した所以は、「自己移入」の機能と「言語」、とりわけ文字表現の「潜在化した伝達 virtuell gewordene Mitteilung」(VI, 371) 機能にある。つまり文化的意味の「伝統化」は、先人たちの「史料編纂」と、後世の人々による、文字記号に「沈殿」した根源的意味の「再活性化 Reaktivierung」作用によるものと考えられている。

しかし、そもそも「心理学的系統発生」という表現には、生物学的な種の分化や多様性に相当するものが、意味伝播の過程においても生ずるということが含意されているであろう。従って「民族」の分化が生み出す文化的多様性や、文化間の相互理解などもまた、意味の世代的発生の根幹に関わる事象として考察されねばなるまい。

第三節　故郷と異郷に関する世代発生的考察

世代の連鎖の中で、人間という種の内部でも絶えず「民族」単位での分化と拡大が進行し、その結果、比較的近しい関係にある部族や、もはや交渉不可能なほどにかけ離れた異民族など、様々な民族的共同体が生まれては繁栄し、あるいは滅亡をむかえる。地理的、歴史的な文化の多様性は「伝統」の相違として、例えば原初的段階では「神話 Mythos」に反映される世界統覚の体系的相違などとして現れる。こうした人間的「世代性」の多様に目を向ける

とき、意味伝播の運動は、自己移入や言語の機能に基づく「伝統化」の過程のみならず、世代性を異にする異他的な民族との遭遇という観点からも考察されねばなるまい。これは「心理学的系統発生」において「切り離された諸々の世代性 Generativitäten」(XXIX, 62) と、その意味的「統合」に関わる世代発生的問題である。

ところで、生物学的な「個体発生」と「系統発生」の連関を考慮すれば、人類の「心理学的系統発生」に対して、人間の〈心理学的な個体発生〉というものもまた世代を考える上では重要な意義を持つのではないか。成熟した大人へと至るまでの「幼児」の心理的成長は超越論的に見れば、周囲世界の地平的拡大に伴う統覚システムの推移として捉えられる。しかし幼児期への遡及的問いによって露呈される個的な発生を、直ちに世代発生的考察の成果と見なすことはできない。「個々の人間は必然的に自らの世代発生的（民族的）連関の中で生きる」(XXIX, 9) という観点に立つとき、個的な生における意味伝達の過程は、自己固有の伝統の継承と、異なる文化的伝統への理解、この双方を契機とする包括的な「世代発生的（民族的）連関」の抽象化された一齣と見なされる。

これについてスタインボックは端的に、「世代性」は「最も包括的な」方法によって取り扱われるべき「現象学の最も具体的な次元」[5]に属すると述べている。そして彼はこの「最も包括的な」世代発生的現象学の方法を、フッサール自身が方法論的に定式化した発生的現象学と対比して次のように特徴付ける。即ち「個的な主観性、同時代の個々人の共時的領野、自我論において基礎付けられた相互主観性、これらの生成に制限された発生的分析とは対照的に、世代発生的現象学が取り扱う諸現象は、まさにそもそもの始まりから、歴史的、地理的、文化的、相互主観的で規範的な諸現象である」[6]と。彼は個人の生に制約されない現象として、「故郷世界」と「異郷世界」の対立概念を世代発生的現象学の根本的な枠組みとして据えるが、その際、両者は「共-世代発生的 co-generative」なものと

解されている。即ち故郷と異郷に対する経験様式は「共に」連関しながら他方を暗黙のうちに「限界づける経験遂行 liminal experiencing」として捉えられる。彼によればこの「限界づける経験遂行には『我有化 appropriation』と『侵犯 transgression』という二つの様式がある。この構成的な二重奏 duet は、故郷の我有化的経験を通じた異郷の共-構成、そして異郷の侵犯的経験を通じた故郷の共-構成として展開される」[7]。「我有化」とは、故郷の文化的伝統を引き受ける意味構成の過程であり、これを通じて異郷が、われわれにとって馴染みのない「異常なもの」として、暗黙のうちに限界づけられて共に構成される。また「異郷との侵犯的遭遇」[8]によっては、異郷が「異常なもの」として構成されるにとどまらず、「異常性」の出現によって「正常性」そのものが際立たせられ、故郷的なものが限界点において同時に共-構成されるというわけである。

さて、故郷と異郷の「共-世代発生的」解釈に基づいて、スタインボックは二項の「還元不可能性」を主張し、これらが「一切を包括する『一つの世界』」といった「より高次の統一へ統合されることはあり得ない」[9]と述べている。彼の見解によれば、故郷と異郷は止揚不可能な根本的枠組みとして存立し、「一つの世界」はその「統合」の結果、最終的に達成され得る高次の世界と見なされるのだが、この過程の現実的な実現可能性を彼は承認しない。

しかしこうした主張に対しては、むしろ「一つの世界」を証示する自然素朴な経験が先行し、その地盤に基づいてのみ故郷と異郷の分化が明示化され得るとする批判的見解が向けられている[10]。この批判の論拠は実際、フッサール自身が随所で記している。「第五省察」においても、異文化への具体的な接近の根底には、万人にとって無条件的に接近可能な「自然の共通性」(I, 149) が存することが明言されており、こうした見解は草稿において「自然の脱神話化 Entmythisierung」をめぐる議論へと掘り下げられている。即ち、諸々の民族は自己固有の世代性に基づいて

様々な「神話」を形成するにもかかわらず、相異なる神話の中にはやはり、「同じ大地」や「同じ天空」、さらには「地震、洪水、嵐といった同じ類型の出来事」を見出すことができる（XXIX, 44）。彼の明言するところによれば、「いかなる民族、その民族のいかなる者にとっても、民族的な周囲世界は、普遍的な（全人類的）大地地盤 Erdboden の統一に関係付けられている」（XXIX, 38）のである。

ヘルトはまた、論文「故郷世界、異郷世界、一つの世界」の中で、本来的な世代性、即ち「神話的に物語る世代性」に対して、その「先行形式」を為すものを、フッサールが「原世代発生的なもの das Urgenerative」（XV, 433）と呼んだことに注目している。それは、われわれを「死」へと追いやる「欠乏状態」や、われわれに「再生」を感受させる「欠乏の満足」などを意味する。[11] そしてヘルトは、異文化の「神話と歴史」がどれほど異質なものであるにせよ、それに対する「史的な自己移入」は、その「先行形式」としての「原世代性 Urgenerativität の理解」が起点として機能することによって進展すると考える。[12] しかし「原世代性」や「脱神話化」された「自然」といった最低限度の共通理解が、異なる伝統に対する自己移入を促すとしても、それは故郷と異郷の「統合」の結果として最終的に確立すると見なされた「一つの世界」と同一のものではあるまい。本節を締め括るにあたって、この「一つの世界」への文化的統合の可能性について再度、考察したい。

そもそも異郷世界への理解が順調に進んだとき、その結果として生じるのはやはり地平的に拡大された故郷世界に他ならず、その意味においてあくまでも「有限の世界」に留まる。「諸々の生活世界と諸世代の綜合は……或る無限の世界を『可能な経験の世界』として生み出しはしない」（XV, 207）と言われるように、人類全体を一様に包括する「一つの世界」、「無限の世界」は単なる「理念」（XV, 181Rb.）に過ぎず、これを異文化理解の結果生み出され

た有限の故郷世界と混同することは許されない。[13] 学問の理念が「無限のプログラム」として事実的な世代の連鎖に託されたように、諸民族を等質的に内包し得る「人類」全般にとって共通の世界というものもまた、世代の連鎖の中で実際に完全に実現されることはないだろう。ただし、本稿では詳しく論ずることはできなかったが、民族を超えた全人類の統一を、フッサールが「ヨーロッパ的」な「学問」の伝播に託したということも一つの事実である。

結語

そもそも世代発生的問題の筆頭に挙げられたのは「誕生と死」の現象であった。世代の連鎖は他者の「誕生と死」を契機として継続される。超越論的現象学はこれを、還元によって開示される超越論的領界の中で考察する。「第五省察」のための準備草稿において、フッサールは「何らかの意味で私の超越論的端緒を動機づけ、『基礎づける』ものは何か。私の両親や更なる先祖との世代発生的連関であろうか」(XV, 38) と問うているが、「両親や更なる先祖」に対する私の依存関係は、自然的構えを採る限り極めて自明な事柄である。しかし還元によってこの自明性は「他者、世代、世界の、私のエゴへの超越論的な依存」(XV, 38) 関係として捉え直される。

それではこの超越論的なエゴそのものの「誕生と死」についてはどうであろうか。フッサールは「超越論的自我」の「不死性」および「誕生するということの不可能性」(XI, 377) を主張し、次のように述べる。「いかなる人間-自我も自己のうちに或る仕方で自らの超越論的自我を含み持っており、その超越論的自我は死ぬことなく、また生まれることもなく、それは生成における永遠の存在である」(XI, 381) と。彼は晩年、「世代」を意味付けるこの不生不滅のエゴに付き纏う「本質上の曖昧性」を指摘している。全人類が超越論的エポケーに服する以上、還元によっ

て到達されるこの「エゴ」に「人称代名詞」の区別を持ち込むことは無意味であり（VI, 188）、従ってこれを日常的な「私」という意味から理解することは不可能である。フッサールによれば、死すべき人間の一人に過ぎないこの「私」は、無人称にして不死の超越論的エゴの自己客観化的様態に他ならない。親や先祖、世代に対する私の自然的な依存は、このようにして超越論的に究明される。

本稿ではフッサールの世代発生的考察を「生の繁殖」と「意味の伝播」という観点から整理したが、最後に一連の考察をモナド論の文脈で捉え直したい。「究極的な存在認識が『形而上学的』と呼ばれねばならないというのが真であるとすれば」（I, 166）、世代発生は現象学的意味でのモナド論的「形而上学」に属する課題である。生や系統発生の文脈に通じるものとして、フッサールは「個々のモナドの可死性のもとでのモナド全体の『不死性』」（XV, 195）といった記述を残している。個々の生命の「誕生と死」によって形成される世代連関そのもの、即ち世界を歴史的に構成する「生命」そのものは、全体として決して滅びることはないとされる。さらに以下の引用からは、この不滅の生命のうちに含まれた意味伝播の可能性を読み取ることができよう。「或るモナド、例えば死にゆく人間のモナドはその遺産を失わない。しかしそれは絶対的な眠りへと沈みゆく。そのときもまた、そのモナドは何らかの仕方でモナド全体において機能する」（XV, 609）。

われわれはまさに後世を担う者として、身体的には死を迎え「絶対的な眠り」にある先人たちの所産を「再活性化」しながら「伝統」として引き受け、未来へと継承することができる。この可能性は原理上、異なる民族の伝統に対しても開かれている。フッサールの世代発生的考察は「生殖」の問題を取り扱う一方で、この地理的、歴史的に遂行される文化的な意味理解と意味伝播の運動を、超越論的還元が開示する「エゴ」の場において解明すること

を意図したものである。

注

フッセリアーナからの引用は巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で略記した上で本文中の括弧内に付す。ただし、編集者の序文から引用する場合は、巻数、頁数ともにローマ数字で表記し、文末脚注に記す。なお本稿において引用したものは以下の通りである。

Bd. I *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge, hrsg.* von S. Strasser, Den Haag, 1963.

Bd. VI *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie,* hrsg. von W. Biemel, Den Haag, 1976.

Bd. IX *Phänomenologische Psychologie.* Vorlesungen Sommersemester 1925, hrsg. von W. Biemel, Den Haag, 1962

Bd. XI *Analysen zur passiven Synthesis.* Aus Vorlesungs-und Forschungsmanuskripten (1918-1926), hrsg. von M. Fleischer, Den Haag, 1966

Bd. XV *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität,* Texte aus dem Nachlass, Dritter Teil: 1929-1935, hrsg. von I. Kern, Den Haag, 1973.

Bd. XXIX *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie. Ergänzungsband,* Texte aus dem Nachlass 1937-1937, hrsg. von Reinhold N. Smid, Kluwer Academic Publishers, 1993

(1) ただしフッサールが問題とする「学問」は彼の最後の著作からも明らかなように、「ヨーロッパ的」と形容される。

(2) スタインボックの「限界現象と経験の有限性」(『思想』第九一六号、二〇〇〇年一〇月、二一八～二四三頁)を翻訳した神谷英二は、フッサールの「世代性」が「生物学的な種の反復」などではなく「意味の世代発生」に関わる「超越論的概念」であることから、generativ の訳語として「世代発生的」を当てている。本稿も同じ理由から「世代発生的」の語を採用するが、「生物学的な種の反復」もまた事象的に考察されている点を付け加えておきたい。

(3) XV, XXXVI

(4) Bernhard Waldenfels, *Das Zwischenreich des Dialogs. Sozialphilosophische Untersuchungen in Anschluss an Edmund Husserl*, Den Haag, 1971, S. 346

(5) Anthony J. Steinbock, "Generativity and generative phenomenology" in *Husserl Studies*, vol. 12, No. 1, 1995, S. 73

(6) Anthony J. Steinbock, *Home and beyond: Generative Phenomenology after Husserl*, Northwestern University Press, Evanston, 1995, p. 178

(7) ibid., p. 179

(8) ibid., p. 181

(9) ibid., p. 237

(10) Gail Soffer, "Book Review, Anthony Steinbock, Home and Beyond: Generative Phenomenology after Husserl" in *Husserl Studies*, vol. 14, No. 2, 1997, p. 155

(11) Klaus Held, "Heimwelt, Fremdwelt, die eine Welt", in *Phanomenologische Forschungen*, Bd. 24/25, 1991, S. 322

(12) ibid., S. 323

(13) ibid., S. 328

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

Über Husserls generative Überlegung

Naoya MAEDA

In seinem späten Denken untersucht Edmund Husserl die Geschichte, besonders die Tradition der europäischen Wissenschaften. Seit etwa 1930 wurde seine transzendentale Analyse allmählich erweitert und vertieft in Richtung auf die 'Generation'. Er beschreibt oft die Generationsverkettung mit dem Wort 'fortpflanzen' oder 'Fortpflanzung'. Mit diesem Wort können wir seine Überlegungen über die Generation vorläufig in zwei Teile einteilen. Einerseits thematisieren die generativen Überlegungen den sich biologisch fortpflanzenden Prozess, durch den eine Generation spätere Generationen gebärt und die Verkettung des Lebens fortsetzt. Andererseits analysieren sie den sich geistig fortpflanzenden psychologischen Prozess, wodurch die Ergebnisse der menschlichen konstitutiven 'Leistungen' von Generation zu Generation als Tradition überliefert werden. So erfasst Husserl mit seinem eigenen transzendentalen Begriff der 'Generativität', was die Fortpflanzung von Leben und Sinn ermöglicht.

Diese Abhandlung behandelt seine generativen Überlegungen unter drei Gesichtspunkten. Erstens handelt es sich um seine wissenschaftliche Absicht. Er schätzt die "Cartesianische(n) Idee einer Philosophie als einer universalen Wissenschaft aus absoluter Begründung" hoch, aber hält es für selbstverständlich, dass "die praktische Durchführbarkeit" von der Idee als ein unendliches Programm der künftigen Generationsverkettung überlassen wird (I, 178). Zweitens zeichne ich die generativen Überlegungen in Umrissen in Bezug auf die biologische Ontogenese und Phylogenese und die psychologische Phylogenese. Drittens sehe ich, mit Hilfe Steinbocks generativer Phänomenologie, die kulturelle Einfühlung zwischen Heimwelt und Fremdwelt als das Problem "der getrennten Generativitäten" (XXIX, 62) und der Synthese derselben an. Darin zeigt sich, dass Heimwelt und Fremdwelt nicht in einer alles umfassenden Welt vereinigt werden können.

キーワード：世代，誕生と死，故郷，異郷